著者インタビュー

地域再生は「食」中心に眠る力を組み合わせろ

金丸弘美（かなまるひろみ）（食環境ジャーナリスト）

『田舎力――ヒト・夢・カネが集まる5つの法則』

――大分県竹田市や兵庫県豊岡市など元気な地域や人の集大成で、地方活性化の教科書でもあります。地方の将来に対して元気がわいてきます。

■食の安全問題、食料自給率などの農業の今後、衰退する地方。そういった「問題」は大勢の人が取り上げ、確かに存在するのですが、あえて元気な話だけを書こうと思いました。問題を指摘するだけでは希望はありません。紹介したい元気な地域がまだまだあるので、パート2を考えています。

――「発見力」「ものづくり力」「ブランドデザイン力」「食文化力」「環境力」が地域を再生させると説き、現場からの報告にこだわっています。

■「食の安心・安全」とか、「自給率向上」とかいってみても、すべて抽象論です。自給率を考えて農業やっている農家なんていませんよ。「食育」だって、現場を考えないから栄養バランスの話になって興味を持てない。

でも現場に足を運ぶと、そこにしかない食材やその食材を使った伝統的な料理、歴史的な背景や文化、そして食材や料理にまつわるさまざまな人に出会う。そこには現状を変えていくヒントやきっかけもあるんです。

――何とかしたいと悩んでいる人にとって大いに参考になるでしょう。

■雑誌の編集者やライターとして各地を取材してきましたが、「自分に求められる役割は何か」と考え続けてきました。奮闘しながら成果が出ないケースなどに出会うと、「あの人と手を組めばいいのに」と以前に取材した人を思い浮かべることもありました。

そこで「地域の運動と私の行動、そして出版をセットしよう」と考えました。単なる先進的な事例の紹介ではなく、考える手掛かり、新たな動きを始めるヒント、人と人を引き合わせるきっかけにしてもらいたいのです。

――時代の変わり目が、地方には追い風にもなっていますか？

■10年、20年前ならば「ただの変人」が、注目され始めたのはいいことですね。ただ、観光も商店街の活性化も、今まであるはずだと思ったレールは崩れています。企業を誘致して起爆剤に、なんて発想はあり得ないんですから。自分たちの手で産業づくりをしていかなくてはならない時代です。

――産業づくりは難しいですね。

■そこで「食」です。暮らしを豊かにし、環境を守り、農業や漁業を生かして観光も元気にできる、地域の個性も崩したくないと考えると、食を中心に据えれば身近です。若者も、農業やろうというと暗くてしんどいイメージを持つけれど、「農家レストランをやったらいいんだよ」というと、「かっこいい」と面白がってくれる。

今は高齢者が半分以上を占める「限界集落」とか、「耕作放棄地」とか、地方についてまわる暗い話が多い。でも、人を含めた地域に眠っている力を大きな視点で組み合わせ、100年後を見通す発想を持つと可能性が見えてくる。「捨てたもんじゃないよ」「もっと自信を持ってよ」と言いたいですね。

（聞き手＝中村秀明・毎日新聞論説室）

NHK出版 生活人新書
735円

新刊

『ダブル・クラッシュ』

渡部和孝著
日本経済新聞出版社、2520円

今回の世界不況は1997年の日本の金融危機同様、不動産担保融資による金融機関の過剰なリスク負担、破綻が直接原因、と分析。「グローバル資本主義の終焉」などの「観念論」に踏み込まず、不動産業への貸し出し規制やリスク度をきめ細かく設定した自己資本比率規制などを提案した実現可能性重視の本だ。難解な数式やグラフを飛ばして読んでも理解できる。

『逆境経営　7つの法則』

水尾順一著
朝日新書、735円

福原義春社長（現・名誉会長）による資生堂改革時に事務方を務め、経営改革の第一線で働いた後、同社を退職し、西武ホールディングス企業倫理委員会など現場で改革に協力しながら、大学で研究活動を行う著者が、「壊すことから始めよ」「カネを惜しむな」「威張らない上司」を養成せよ」など7つの法則や改革を成功させる5つの秘訣を紹介。具体例が生々しく、説得力十分だ。

『新・日本のお金持ち研究』

橘木俊詔・森　剛志著
日本経済新聞出版社、1785円

2005年出版の『日本のお金持ち研究』の第2弾。面白かったのはお金持ちといっても成金と筋金入りとでは消費行動が違うことや、上流階級の金持ちが減っていることなどか。日本のお金持ちは欧米に比べれば規模が小さい。統計中心の一般的な格差論では見えない部分から丁寧に拾ってきた貴重